

東アフリカ半乾燥地における農耕 - 牧畜複合に関する史的考察 —タンザニアの大地溝帯 (Eastern Rift Valley) と その周辺を事例として—

鶴田 格

近畿大学農学部環境管理学科

Agriculture-pastoralism complex in semi-arid areas in East Africa: A case of Eastern Rift Valley in North-central Tanzania

Tadasu TSURUTA

Department of Environmental Management, Faculty of Agriculture, Kinki University

Synopsis

The Eastern Rift Valley is an area with complex geography and climate, which allows various ways of subsistence including hunting, gathering, cultivation, and grazing livestock. Notably, combining agriculture and pastoralism is one of the most prevailing survival strategies of the people living there. In this paper, two agro-pastoralists in this area, the Iraqw and the Gogo, are examined from the viewpoint of the agriculture-pastoralism complex. Both ethnic groups have primarily been agriculturalists, but they also attach great importance to livestock (especially cattle) which are still important means to gain women, labor, and wealth. At the same time, cattle and other livestock provide foodstuffs (milk and meat) in times of drought and famine. Unlike mixed farming in Europe, few organic relationships existed between agriculture and pastoralism. However, the economic role of livestock has gradually changed since the beginning of the colonial era, due to the expansion of commercial agriculture. Cattle had come to be used as investment capital to expand cash crop production. Thus the economy brought about a new relationship between farming and livestock keeping, which formerly were not closely linked in the household economy in Iraqw and Gogo. Today, the socioeconomic and cultural importance that livestock had in their traditional life has considerably declined in response to the diversification of sources of income and the penetration of modern lifestyles.

1. はじめに

アフリカの半乾燥地帯やその周辺部では、農耕と牧畜というふたつの主要な生業形態がきりはなせない関係にある。まず、農耕と牧畜の両方に従事する農牧民 (agro-pastoralist) あるいは半農半牧の生活様式というのがひろくみられる。また、通常は牧畜民とされている人々が農耕する事例はおおいし、逆に農耕民とされている人々でも相当数の牛を所有している (あるいは過去に所有していた) 場合がたくさんある。そして家畜の保有は農業経営のあり方とも密接な関係をもっている。

牧畜という要素をぬきにして、アフリカ半乾燥地の農村社会の歴史、現状、そして未来をかんがえることはできない。

牧畜のさかんな半乾燥地は、ほとんど降水のない砂漠と湿潤な熱帯雨林帯にはさまれるようにして西アフリカから東アフリカにかけて帯状に存在する。歴史家の John Iliffe (1995: 97) は、(地理的な理由から) 西アフリカでは牧畜民と農耕民の関係がきれる傾向があるのに対し、東部および南部アフリカではその複雑な地形・自然環境のせいで両者が混在しているため、より密接な相互作用がある、という趣旨のことをのべている。たしか

に東アフリカのサバンナ地帯では、ナイロート系の牧畜民とバンツー系（もしくはクシ系）の農耕民がモザイク状に混在しており、いわば農耕の世界と牧畜の世界とがかさなりあっている。そこでは農耕民と牧畜民が共存（あるいは対立）してきただけでなく、同一世帯（もしくは同一集団）が農耕と牧畜というふたつの生業に同時に従事する場合がたいへんおこった。

本論文では、そうした典型的な農耕－牧畜複合が観察される地域として東アフリカ、タンザニアの中央部を縦につらぬく大地溝帯（Eastern Rift Valley）とその周辺地域をとりあげ、農牧という生業複合のあり方が20世紀の政治経済の変動にともなってどのように変化してきたかを考察する。農耕と牧畜というと、農耕民と牧畜民の土地をめぐる対立（耕地か牧野か）、というテーマでしばしば語られる。しかし、じっさいには農耕民と牧畜民はしばしば共生的関係にあっただけでなく、一方が他方に転換することもよくおこったのである。また農牧民においては、農耕と牧畜というふたつの生業を並行しておこなうことは、とくに降雨の不安定な半乾燥地においては有効な生存戦略でもあった。そこでここでは、農耕と牧畜という一見相反するような生業形態が、世帯レベルもしくはコミュニティ・レベルでどのような相互補完的な関係にあったのか、ということを中心に農耕－牧畜複合の歴史の変容を検討してみたい。同時に、現代的な貨幣経済の文脈における生業や投資の多様化、多角化ということも視野にいれて論じていきたい。

本論文では、東アフリカのナイロート系牧畜民のなかでもっとも南に進出したマサイとダトogaにそれぞれ隣接し、それらの影響をうけてきた農牧民ゴゴ人とイラク人をとりあげて、その生活における農耕－牧畜複合の様態と隣接牧畜民との関係をまず1960年代の民族誌に依拠して記述する。さらに他の歴史学的研究や1960年代以降の臨地研究のデータを参照して、その歴史の変容について考察する¹。

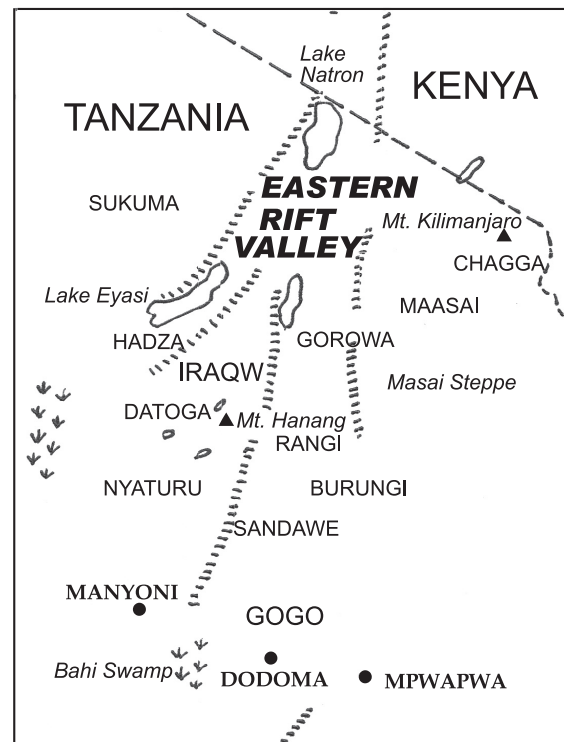


図1：大地溝帯周辺部の民族集団 出典：筆者作成

2. タンザニア北部 ～中央部の地域生態史と農耕・牧畜

ここでは次節以下の記述の歴史的前提として、タンザニア北部の大地溝帯（Eastern Rift Valley）周辺における現在の民族ならびに生業に関する地理的分布が成立した歴史の経緯について、簡単にまとめておきたい。

ここであつかう大地溝帯とは、ケニアの火山高地からタンザニア北部をとって中央部にまでいたる部分である（図1）。溝にそって年中枯れない大きな湖が点々とあるとともに、大地の起伏がうみだす複雑な地形をもっている。この地域には太古から人類がすみついてきたが、こうした地理的条件（複雑な地形と変異のおおきい降水パターン）に適応するかたちで、狩猟採集、農耕、牧畜などの多様な生業が複雑にいくんだ形でいとなまれてきた。そうした事情に関して、考古学者のJ. E. G. Suttonは次のようにのべている。「(大地溝帯の地理的変異は) 標高の高低だけでなく、降水量や植生にもみられ、優良な牧草地が肥沃な丘

1 本論文では基本的に先行研究のデータを使用しているが、一部に筆者が現地ですら直接えた情報をまじえている。現地調査は、科研究費「アフリカ・モラル・エコノミーを基調とした農村発展に関する比較研究」（代表者：杉村和彦福井県立大学教授）の一環として、杉村氏、坂井真紀子氏（緑のサヘル）、そして現地NGOの椿延子氏ならびにC. N. Nzullunge氏と共同で2010年8月におこなわれた。以上の諸氏との議論からえたものもおこった。しるして謝意を表したい。

陵や山地性森林と隣接している。そこでは生産的な農業が今にいたるまでつづけられ、その隣では専門的な家畜飼育がさかんにおこなわれ、また森林では熟練した狩猟者や蜂蜜採集者の小集団がくらししている」(Sutton 1990: 29)。またこの地域へは周辺からさまざまな言語系統の民族が流入し、生業の複雑さとあいまって、民族的な複雑さもうみだしている。こうした民族的に複雑にいりくんだ状況を Schneider (1979) は「大地溝帯の変則性 (rift anomaly)」ということばで表現している。

タンザニア中部のコンドア周辺には石器時代から狩猟採集者がすんでいたことをしめす壁画が集中的に分布している。こうした狩猟採集者の末裔とされるのが、現在でもこの地域の周辺にくらすコイサン語族の人々、ハツァ Hadza とサンダウエ Sandawe である。ハツァは現在でもいちおう狩猟採集に従事し、サンダウエは狩猟採集の要素をのこしつつ農耕と牧畜に従事してきている。

次に、この地域ではおそくとも紀元前 1,000 年ころには家畜飼養や穀物栽培がおこなわれていたと推定されている。農耕(牧畜)民族としては、クシ系の民族と、そのあとから流入してきたパンツ系系の民族がいる。当初は、この地域はひろく(エチオピア方面から移住してきた)クシ系の民族が居住していたとおもわれる(Sutton 1990: 30, 32)。現在のイラク Iraqw とその近縁のゴロワ Gorowa、およびブルンゲ Burungi はその末裔と推定されている。そこにパンツ系系の農耕民がさまざまな方向から流入してきたとかがえられる。農耕については、大地溝帯特有の起伏ある地形からうみだされる流水、湧き水、湖水が入手しやすいところでは、灌漑施設さえつくられた(*ibid.*: 33-41)。主食作物としては、こうした半乾燥地の農耕で重要なソルガム(モロコシ)やトウジンビエ、シコクビエなどの雑穀が栽培されていたとおもわれる。20 世紀になると、新大陸原産のトウモロコシが雑穀にかわる有力な主食穀物としてひろく浸透した。

18 世紀にはいると、ケニア方面からナイロート系牧畜民であるマサイとダトーガが徐々にこの地域に移住してくる。とりわけマサイの侵入は当時の北部タンザニア社会をゆるがす衝撃的なできごとだった。18～19 世紀に最強の戦士集団とし

て数々の民族紛争に勝利し、周囲の民族に多大な政治的・社会的・経済的・文化的影響を与えたのである。これを Sutton (1990: 52) は「マサイ革命」とよぶ。マサイが現在「マサイ・ステップ」とよばれる広大な乾燥サバンナとその周辺を占拠したのに対し、ダトーガはその西方のより湿潤な地域(灌木サバンナ)に小集団ごとに分散していった(富川 2005: 27-71)。

しかしこの地域は牧畜に有利な条件ばかりがあったわけではない。牧畜の拡大のおおきな障害となったのが、眠り病を媒介するツェツェバエの存在である。ツェツェバエは森林の水辺などをこのんで生息する。この地域ではとくに 1920 年代以降にツェツェバエ生息域が急速に拡大した(Iliffe 1979: 270-2)。そうした地域に牧畜民あるいは家畜をもった農耕民が進出するためには、森を焼きはらわなければならなかった。また 19 世紀末には東アフリカにひろく牛疫(rinderpest)の大流行がおこり、多数のウシがうしなわれた。こうした自然災害がひき金となり、家畜の略奪行為が増加し、牧畜民どうしの対立関係、あるいは牧畜民と農耕民の緊張関係をエスカレートさせたとかんがえられる。

現タンザニア北部～中部の農耕民や農牧民は、こうして移住してきた牧畜民の集団にさまざまな形で関係をもった。たとえば農牧民イラクは、後述のように植民地期以前はダトーガやマサイの襲撃をさけるために山岳地帯で生活していたといわれている。植民地期以降は、イラクがその源郷である山岳地帯をでて低地のサバンナに進出していく過程で、イラクとダトーガはしばしばおなじ地域に混住(ある場合には融合)するようになる。両者の混住地では、たとえば穀物不足のダトーガが家畜との交換によってイラクからトウモロコシを入手したり(ある場合にはダトーガ自身が農耕民化する)、マサイという共通の敵にたちむかうために儀礼を共有したり、というような密接な関係がみられた。薬草を使った治療などにおいてもダトーガはしばしば自分ないものをほかの農耕民族にもとめた(富川 2005: 56-64, 82, 243; Tomikawa 1979: 23-7)。イラクよりさらに南方にすむゴゴ人も、隣接するマサイ系牧畜民と、同様な相互依存的(ある場合には対立的)関係にあったとかんがえられる。

こうした相互接触の過程で、ナイロート系の牧

畜文化がしだいに農耕民（あるいは農牧民）にも浸透していったとかがえられる。もともとウシとは関わりがすくなかったかもしれない農耕民が、なぜウシをこのんで飼うようになったのだろうか。このことを考察するうえで示唆的なのは、1960年代のタンザニア北部のエヤシ湖周辺における、今西（1965: 185-7）による次のような観察である。今西によれば、そのパンツ系農耕民（スクマなど）は、よほどの貧農でもないかぎり有畜農家である。かれらがウシ、ヒツジ、ヤギを飼うのは、役畜としてはたからせるためでも厩肥を採取するためでもなく、一種の貯蓄としてなのである。彼らはまずトウモロコシの増産をはかり、すこしでも余剰ができると、それを近隣のイラクやダトーガのもつヒツジやヤギと交換する。ヒツジやヤギがふえるところではそれをウシと交換する。次にふやしたウシを定期市で販売して現金にかえ、それを農耕に投資する。同時に、それがメス牛であれば乳をしぼって日常利用し、またどんな家畜でも屠殺すれば饗応のさいの肉を提供してくれる。さらに家畜は婚資としても重要である。

このように土地が豊富に存在し、また移動性のたかかった当時の農耕民社会においては、土地に資産としての価値はなく、家畜こそが資本として、社会的交換財として、相続可能な財として重要だったのである。家畜はまた日常的に乳という形で食料を供給してくれる。またそれは後述するように、危機的な状況あるいは非常事態をのりこえることを可能にしてくれる財産でもあった。こうしたなかで、イラク人やゴゴ人のような農耕にも牧畜にも従事する農牧民とよばれるような人々が形成されたとかがえられる。つぎに、そのイラク人とゴゴ人の農牧複合の変遷についてくわしく検討してみたい。

3. イラク人の半農半牧社会とその変容

(1) イラク人の農耕と牧畜

イラク人 (*wairaqw*) は、もともと何世紀も前にエチオピアから現タンザニア方面まで移住してきたクシ系の人々の末裔といわれている。牧畜民マサイやダトーガの襲撃をさけるために²、19世紀末までは *Iraqw'ar Da/aw* という森林にかこま

れた湿潤な丘陵地帯に暮らし、集約的な農業をおこなっていた (Börjeson 2004)。それが19世紀のおわりすなわちドイツによる植民地統治がはじまり、牧畜民が平定されて治安が回復し、ツェツェバエの駆除をかねた開拓 (森林伐採) が進行するのに応じて、より平坦で乾燥した低地のサバナに進出してきた。こうした領域拡大の結果、その人口は1890年から1960年までに5~6倍に増加したと推定されている (和田 1968a: 297-300; 米山 1990: 171-5)。

イラク人は故地 *Iraqw'ar Da/aw* より北方および南方へ徐々に進出し、南方ではもともと牧畜民ダトーガ (の一派バラバイガ) の領域であったハナン山の周辺にまで到達した (図1)。ハナン山麓にあるイラクの開拓村ギティン *Giting* を1960年代に調査した福井と和田によれば、もともと牧畜民ダトーガがそのあたりの疎林帯をツェツェバエの駆除のために焼きはらって放牧地としていた。こうしてきりひらかれた草原に、はやくも1892年ころからイラク人が進出しだし、しだいに耕地化していったのである。こうした進出の過程で、新規移住者のイラクと先住者のダトーガは友好関係や婚姻関係をむすぶようになった。イラク人が故地より移住してきた原因としては、植民地政府からの徴発をのがれるため、(土地と家屋敷の) 末子相続制により末子以外の者は外部に新天地をもとめるため、などさまざまな理由があげられている。また調査対象地区の世帯主の4分の3は本人の世代に來住している。とりわけギティン村へ移住してくる直前に (わずか15kmほどしかはなれていない) ウファナ *Ufana* という地域にいた者の割合がたかく、その移住の理由としておおくの者が「ウファナでは干ばつがづづいたり、害虫が発生したりして作物の収穫量が大幅に減じた」ことをあげている点に注目しておきたい (和田 1968a: 297-9; 福井 1968: 280-1, 296; 1969: 8-13)。

次に、1960年代当時のギティン村におけるイラク人の農耕と牧畜についてみてみよう。主食穀物に関しては、以前はソルガム、シコクビエやトウジンビエを中心につくっていたとおもわれるが、福井の調査時点ではそれらの雑穀は主として酒造用に生産されるのみ³で、すでにトウモロコシが主食の地位をしめていた。家のちかくの畑に

2 もっともこうした単純な「包圍攻撃仮説 *siege hypothesis*」に対しては近年異論がとなえられている (Börjeson 2004: 70-1, 82)。

3 ただしトウジンビエに関しては、鳥がおおいので栽培に不適という理由でギティン村ではつくられていなかった (福井 1968: 283)。

休閑期間をあまりおらずに火入れをし、トウモロコシ、雑穀、サツマイモ、マメ類、ウリ類などが作付けされる。肥料として家畜の糞と土のまざったものが使用されていた。以前は家畜を販売することが主要な現金収入源であったが、当時すでに一部世帯によるタマネギ、エンドウ、ジャガイモ、そしてコムギなど換金作物の生産がはじまっていた。(クワによる) 耕起⁴、播種や除草、収穫などの作業の際には隣人や親族による労働交換のグループが組織された(福井 1968: 283-8; 和田 1968a: 308-9)。

ギティン村のイラク人は、農耕に従事すると同時にウシ、ヤギ、ヒツジ、ロバなどの家畜を飼養している。福井(1968: 288-91)のサンプル調査によれば、ウシは97%ちかくの世帯が所有し、世帯あたりの平均所有頭数は10頭程度であった。ヤギは62%、ヒツジは47%の世帯が所有していた⁵。おおくのウシを所有している者は、ウシをあまり所有していない家族にあずけ、そこで飼育してもらう。この場合、そのメスウシからとれる乳は飼い主のものとなる。家畜からは乳製品や食肉を得ることができるのはもちろん、その糞は肥料や燃料となるほか壁土や穀物貯蔵容器の材料としても重要である。また皮も敷布団やスカートなどとして利用される。放牧地のおおくは(家や畑とちがい)共有地であり、放牧は近隣世帯の共同労働としておこなわれる。

家畜は乳や肉、皮を提供してくれるだけでなく、重要な資産でもあった。当時のギティン村での現金収入源としては、家畜の販売、農作物の販売、特殊技術(櫛の製作販売など)の三つがあったが、(農業収入がふえつつあったとはいえ)この時点では家畜販売による現金収入がもっともおおきかった。病人の入院費や税金をしたらうとき、あるいは衣服や什器を購入するときなどに家畜が(おもに牛市 *mnada* で)販売される(福井 1968: 289)。またウシとの交換により土地(耕地)と家屋を入手する事例もあった(和田 1968a: 304)。とりわけウシは、婚姻の際に夫側から妻側へ支払われる婚資として重要な役割を果たした。一般にイラク人にとって富をあらわす基準は、経営耕地の面積ではなく、所有しているウシの数である(米山 1990: 202-10)。

こうした半農半牧の生活様式は、日常の食事や祝い事などの儀礼においても反映されている。日常的な食事は、トウモロコシの練り粥と酸乳もしくはバターである。牛乳とトウモロコシのお粥も作られる。また結婚式等の儀礼のなかには農耕的要素と牧畜的要素が混在している(福井 1968: 287, 290-2)。

しかしおなじ半農半牧といっても、農と牧の比重をどのような割合でくみあわせるかは地域(あるいは世帯)によりことになっていた。おなじギティン村のなかでも耕地化のすすんだ草地在り優先する地域Aと、疎林帯と湿地からなる放牧適地Bというふたつの生態系があり、Aにすむ住民は農耕に重点をおき、Bにすむ人々は牧畜に重点をおいていた。またBの放牧適地においては、(Aにくらべて)比較のおおくの先住民ダトーガが残留していた。ギティン村ぜんたいでは世帯の割合にして10%強のダトーガがいる。ダトーガの先住地に定着するにあたって、イラク人はダトーガの土地利用に関する規制をうけいれてきた。たとえばダトーガの聖なる土地を侵害すること(宅地や農地にすること)はイラク人のあいだで禁じられていた。また自然境界物や地理的領域的区分は、すでにイラクが優勢であった当時でもダトーガ名でよばれていた。地域の長老が主宰する会議では、つねにイラク語とダトーガ語の通訳がついていた。さらにイラク人による耕地化の波のなかで、村の一部のダトーガは農耕を採用しイラクに同化しつつある(和田 1968a: 305; 1968b: 306; 福井 1969: 13)。また福井・和田らは(具体的な記述はないものの)おなじ牧畜をする民族として両者が協力関係にあったことを示唆している(たとえば放牧地の共有、家畜の入手など)。ギティン村にすむ異民族はダトーガだけではない。村の一部のイラク世帯は農業労働のために近隣の農耕民族であるニャトゥル人を雇うようになっていた。当初は農繁期の一時的労働のためにやってきたニャトゥル人のなかには、イラクの女性と結婚して村に定住する者もあらわれた(福井 1969: 12-5)。

こうしたギティン村での観察をふまえて、福井(1969: 15)は、イラク人の農耕・牧畜複合について次のように総括している。まずイラク人の農

4 当時ギティン村には富裕な一世帯が犁を所有しているのみで、牛耕は一般的ではなかった。

5 ギティン村では、村に來住する際には家畜をあまりもたず、定住してからふやす者がおおかった。家畜を購入するための資金は、農作物の販売もしくは(櫛づくりなどの)特殊技術による収入によって得ていた(福井 1968: 289)。

牧複合においては農耕と牧畜が有機的に結合していないので、自然環境にあわせて農耕と牧畜の比重をかえながら生活することができる。同じギティン村周辺でも、牧畜に適したところでは牧畜の比重をふやし、逆に農耕に適した地域では農耕の比重をふやして環境に適応している。また上述のように、イラク人は農耕と牧畜に関して別々の民族とのネットワークをもっている。牧畜の側面においては牧畜民ダトーガと関係をもつ一方で、農業労働においては農耕民であるニヤトゥル人を雇用する。こうして半農半牧民であるイラク人は（農耕あるいは牧畜に専従している）ほかの民族とくらべて、より自然環境への適応性がたかく開放的な社会システムをもっていた。このことはイラク人の領域拡大を容易にした、というのが福井の結論である。

イラク人の生存戦略として、こうした農・牧の比重の融通無碍な変更とともに重要であったのは、世帯間で行なわれる食料の交換であったとおもわれる。この点に関しては福井・和田の報告はほとんど触れていないので、ここではイラク人の故地 Iraqw'ar Da/aw とそれ以外の移住地域との間の社会的ネットワークについて1990年代に調査したLoiske (2004) によってみてみよう。Loiskeによればイラク人の生業経済を特徴づけるのは社会的交換を前提とした分業である。たとえば（福井の指摘するように）農耕に不適だが牧草が豊富な土地では牧畜を中心とした生業形態をもち、逆に農耕適地では農耕に力を入れて環境条件に応じて穀物や野菜などを自給分以上に生産する。こうして畜産物（ヤギなどの小家畜や牛乳）の余剰をもつ世帯群と、農作物（とりわけ穀物）の余剰をもつ世帯群が生まれ、それらの世帯（あるいは地域）のあいだで物々交換が行なわれる。また地域によって作物の種類や収穫期にもヴァリエティがあるので、そうしたずれを利用して不足する農作物を入手することもできる。こうして牧畜の比重がたかい地域もあれば、農耕が主体の地域もある（また農作物の種類もことなる）という一見多様な農牧複合のありようの背景には、地域や世帯をむすびつける社会的交換のネットワークが存在したのである。

(2) 農牧民イラクの現代的変容

ギティン村では1960年代からすでに放牧地が

急速に換金作物用耕地に移行しはじめていた。換金作物としてはコムギ、トウモロコシ、タマネギ、マメ類などがあったが、なかでも機械をつかって大規模に栽培されていたのがコムギである。コムギ栽培は1962年から始まり、1965年には栽培者が8名に達した。当初はインド系商人が所有するトラクターを借りていたが、のちにイラクの三人の富者が共同で購入したトラクターによって本格的に市場むけコムギ生産をはじめた。こうした農業機械の購入資金源となったのはウシの販売である。1972年にはこの地域のトラクターは12台にまでふえた。さらに富農にやとわれて機械作業に従事した青年が今度は自己資金をふやすようになり、1974年にはギティン村で富農といえはトラクターをもった若者をさすようになっていたという（福井1969: 15-6; 和田1978: 426; 1980: 400-2）。このように1960年代後半から70年代にかけて、ギティン村のイラク人（とりわけ裕福な者）は富の増加の手段として家畜飼養よりも農業生産を重視するようになっていったとかがえられる。

その後のギティン村に関する報告は入手できなかったもので、ここではIraqw'ar Da/awで1990年代から2000年代初頭にかけて人類学的調査をおこなったSnyder (1996; 2005: 87-102) によって、その後さらにイラク人の生業形態がどのようにかわっていったかを追ってみよう。すでにふれたようにIraqw'ar Da/awはイラク人が拡散する以前からの故地あるいは母村であり、そこではせまい土地を利用した集約的な農耕と小規模な牧畜がおこなわれてきた。それに対して20世紀以降にイラク人が進出していった移住先では、一般に母村にくらべ土地が広く、（ギティン村の事例にあるとおり）より大規模な農業（換金作物生産）と牧畜が展開していた。こうした移住地域と比べると、人口過密で土地資源が限られている母村においては農業も牧畜も衰退傾向にあるといえることができる。

Iraqw'ar Da/awでは以前は農作物の余剰があったが、（土壌の劣化や狭小な土地面積のため）いまでは自給分すらまかなえず、穀物の不足分を外部へ移住した親族から、もしくは市場で調達せざるをえない状態にある。しかしIraqw'ar Da/awの人々は外部から一方的に食料をうけとっているわけではなく、あたえる立場にたつこともあ

る。食料を外部の人々と交換するときには、農作物の多様性や外部との作季のずれが重要である。たとえば Iraqw'ar Da/aw とその外部とはトウモロコシの収穫時期がずれているため、それぞれが不足する時期に相手から得ることができる。また湿潤な Iraqw'ar Da/aw では1年中多様な作物をつくっているため、より乾燥した低地にすむ人々は乾季（や干ばつの時）には食料をもとめて Iraqw'ar Da/aw までやってくる。しかし一般に男性はますます賃労働をもとめて外にでるようになっており、労働交換は衰退し、ますます女性に農作業の重荷がのしかかるようになってきている。女性はまたカゴづくり、酒の醸造、果実・野菜・薪炭の販売など、さまざまな現金収入獲得活動に従事している (Snyder 2005: 88-91; Loiske 2004)。

Iraqw'ar Da/aw においてはまた、家畜の頭数や牛乳の生産も減少傾向にある。イラクの伝統社会では、家畜そのものはもちろん、乳も社会的交換財として重要な役割をはたしてきたし、乳はまた豊饒性を象徴するものでもあった。だから乳の生産の減少は、単なる食料の減少を意味するだけでなく、土地、家畜、人間の健康などが衰退し、ひいてはイラク的な生活様式やアイデンティティがおびやかされることにもつながる。とりわけ老人たちはいまだに家畜（なかでもウシ）に愛着をもち経済的にも重要とかがえているが、若者にはそうした執着をもつ者はすくなく、富をふやす方法として家畜飼養以外の道をさぐろうとしている。とはいえ Snyder のサンプル世帯のなかでウシをもっている世帯は82%にのぼっており（世帯当たりの平均頭数は5.4頭）、その半数以上が他者の所有するウシを（乳と厩肥を得るために）借りていた。ウシを貸すという行為は、いまだに親族との関係を維持し富の再分配をおこなう重要な行為である。また最近では完全に個人的な換金目的の事業として、豚を飼う青年がふえている。興味ぶかいことに、豚は（社会的交換財として重要だった）従来の家畜とは別のカテゴリーに属するものとみなされ、それが貸し借りされたり贈与されたりすることはない (Snyder 1996: 321; Snyder 2005:89-95 ; Loiske 2004: 111)。

こうして旧来の農業や牧畜が衰退傾向にあるなかで重要性をましてきている資源が樹木である。

Iraqw'ar Da/aw では1930年代から植林がおこなわれており、その森は村人の生活に欠かせない薪炭を提供してきた。近年、さまざまな理由でふたたび植林がふえている。そのひとつは、政府に土地を接収されないための、あるいは（他人に対して）ある土地の所有権を主張するための植林である。また木それ自身は木材として販売することができるし、果樹であれば果実類の販売から現金収入を得ることもできる。とくに女性でそうした果実販売に従事している人がふえている。また親族などから食料の援助をもとめられたら拒否できないが、木材の販売を目的に植えた木ならば（個人主義的な財産として）親族がそれをつかうことを拒否できる。木に投資することはそうした親族の援助要請から逃れる手段でもある。とくに若い人にとって植林は近代的な生活戦略であり投資の手段となった。このように従前のウシが持つ経済的・象徴的重要性がうすれて、（以前はひくくしか評価されなかった）木や土地の財産的価値が重視されるように変化しているとみられる (Snyder 2005: 95-7)。

次に、イラク人より南のより乾燥した地域にすむ農民ゴゴの事例をみてみたい。

4. ゴゴ人の半農半牧社会とその変容

(1) ゴゴという民族

ゴゴ (*wagogo*) とよばれる人々は、タンザニア中央部の半乾燥地帯にすむバンツー系の民族である (図1)。ゴゴ人のすむ地域の大半は年間降水量が600mm以下で、また雨のふり方もきわめて不安定であるため、農耕にとっては限界地とみなすことができる (Christiansson 1981: 31-4)。そのため、おおくの世帯は農耕だけに依存するのではなく、並行して牧畜をおこない、半農半牧といわれるような生活様式をとってきた。この地域はまたしばしば干ばつとそれに起因する飢饉にみまわれる地域として知られている。

ゴゴという民族カテゴリーは、英国植民地時代におこなわれた「間接統治」の制度⁶によってつくられた側面がつよいとかがえられる。したがって住民にはゴゴ民族としてのアイデンティティあるいはまとまりの意識が一般に欠けてい

6 土着の政治構造を考慮したうえで植民地政府が一定の領域 *chiefdom* ごとに首長 *chief* を任命し、その首長が主宰する行政機関 (Native Authorities) をとおして慣習法にもとづき住民を統治する制度 (1925年～)。ゴゴ人居住地域には38の Native Authorities が設立された (Mnyampala 1995: 17, 51-3)。

る。ゴゴ人の各クラン（氏族）の系譜をみると、隣接するほかのバンツー系の民族（南方のへへ人や西方のニャムウェジ系の民族など）やナイロート系牧畜民マサイなどさまざまな起源に由来しており、この地に流入してくるいろいろな民族の混交によって現在ゴゴとよばれる人々が形成されてきたことを示唆している（Rigby 1969: 13-20, 309-18）。半乾燥地で農耕にとっては条件のわるいところだったので、時代的には（タンザニアの他地域とくらべ）あとの方で植民がはじまったものと推測される。とはいえ 20 世紀初頭にいたるまでそこには（ツェツェバエがすくないことから）牧畜のできる環境をもとめて四方から移民があり、そのおおくはゴゴに同化していった（Maddox 1995: 7-8; 1996: 51-2）。

19 世紀末までは、南方のへへ人と北方の牧畜民マサイのたびかさなる攻撃にさらされ、一部のゴゴ人は一時期（イラク人と同様に）山地においやられていたが、ドイツによる植民地統治がはじまり民族紛争が終結してから、ふたたび平地に展開できるようになった（Christiansson 1981: 39-40）。とりわけ牧畜に関して、ゴゴ人たちは北方の隣人マサイと密接な関係（ある場合には協力的ある場合には対抗的な）をもっていた。たとえば、筆者らがインタビューしたあるゴゴの老人によれば、ゴゴ人はもともとウシをもっていなかったが、男たちがマサイの変装をしてマサイランドに潜入し、ウシをぬすむことによって入手したのだという⁷。この伝説の真偽はともかく、ゴゴが隣接の牧畜民マサイから、家畜そのものから物質文化、社会編成の様式にいたるまでつよい影響をうけていたことは疑いない。ゴゴはとりわけマサイの一派である Ilparakuyo (Baraguyu) とは明白な同盟関係を持ち、マサイの別の一派 (Kisongo) やへへ人による家畜の略奪に対して協同して対抗するだけでなく、（軍事集団としての意味をもつ）年齢階梯組織を Ilparakuyo からとりいれていた（Rigby 1969: 12-3, 19; Mnyampala 1995: 45-6）。

(2) ゴゴの「伝統」社会における生業経済

ここではまず、1960 年代初頭の調査にもとづいてかかれた民族誌（Rigby 1969）を手がかりに、近代化の影響をおおきくこうむる以前のゴゴ人の半農半牧経済についてみておこう。次節で検

討するように、ゴゴの社会経済は Rigby の調査以前にも歴史的激動の波にあらわれているのであり、それがそのまま（たとえば 19 世紀の）「伝統社会」の様態をあらわしているかどうかは疑問がこのところであるが、ここではとりあえず Rigby の民族誌的記述を出発点としたい。

Rigby (1969: 24-6) によれば、ゴゴは「農耕する牧畜民 *cultivating pastoralists*」とでもよぶべき人々である。というのは、じっさいには食料獲得の手段として農耕におおきく依存しているにもかかわらず、かれらの価値観は家畜とりわけウシをたいへん重視するものだからである。とくにゴゴの社会構造の基幹をなす親族関係をとりもつ媒体として、家畜はきわめて重要である。つまり（主たる相続可能な財産としての）家畜をめぐる権利義務関係や家畜の交換が、そのまま親族関係や家族のありようを表現していることになる。この意味でゴゴは「たまたまウシをもっている農耕民」などとは、あきらかに区別される。

ゴゴ人の居住単位であるホームステッド (*kaya*) は、ひとりの既婚女性とその子供を基本に構成される世帯 (*nyumba*) が複数あつまったものである。ホームステッドは物理的な居住空間であると同時に、外部の襲撃から生命と財産をまもる機能を持ち、また政治的、儀礼的な単位でもある。内部にある各世帯は、家長の（ある場合には複数の）妻とその子供をはじめ、家長の兄弟、親族、姻戚、血縁関係にない被扶養者などさまざまな人々から構成されうる。各世帯は、農作物の生産・貯蔵・消費を個別におこなう独立の経済単位である。世帯主である各既婚女性は、それぞれ自身の畑を持ち、自給用作物のほか換金作物も生産する。他方で家畜の所有の単位はホームステッドでありその支配権は家長にあるが、状況に応じて家畜の利用権が各世帯に配分される (*ibid*: 48, 154-87)。

農作物としては、乾燥につよい主食穀物のソルガムとトウジンビエを中心に、サツマイモ、キャッサバ、各種の豆類（ピーナツ、バンバラマメ、ササゲ、キマメなど）や瓜類（キュウリ、スイカ、カボチャなど）をつくっている。換金のためだけにつくられる作物としてゴマ、トウゴマ、タバコなどがある。ホームステッドは頻繁に移動するため、農地に対する所有権というのはなく、

7 Job Matemangwa 老人へのインタビュー、2010 年 8 月 26 日、ドドマ。

(各世帯の) 使用权があるのみである。除草などの作業のさいには互助的労働集団が近隣で組織され、そのさい酒宴 (beer party) による供給をとまうのが常である。家のちかくの畑で収量がへった場合は、家畜糞が肥料として畑に供給される (*ibid.*: 26-43)。

家畜なかでもウシは富の象徴であり権威の源泉である。Rigby の調査したふたつの地域でのホームステッドあたりの平均飼養頭数はウシが 11 ~ 14 頭、ヤギやヒツジなど小家畜が 14 ~ 16 頭程度であった。また何らかの家畜を所有しているホームステッドは全体の 85% にのぼった。逆にいえばホームステッドの 15% は家畜を所有していない、ということになる。また 100 頭以上のウシを所有するホームステッドの家長は富者 (*mugoli wang'ombe*) とみなされる。なかには (まれではあるが) 800 頭から 1,000 頭以上のウシをもつ富者もあったという (*ibid.*: 49-51)。

メスウシから供給される乳や乳製品は日常的に (穀物の練粥への) おかずとして供されるが、同時にたいへん価値のある食料とみなされている。乳やその加工品を客人や知人にふだんに提供できることは富者であることの証明となる。家畜はまた肉の供給源としても重要だが、さまざまな儀礼の際を別として、ふだん (飢饉の時でさえ) 肉のためだけに家畜が屠殺されることはめったにない。しかしゴゴ人にとっては家畜がこうして乳や肉を提供してくれるということは二次的な重要性をもつにすぎない。かれらにとって家畜 (とくにウシ) は、なにより富の蓄積や交換の手段として重要なのである。なかでも婚資のしはらいの際には、個人で対応できる範囲をおおきくこえる数の家畜がとりひきされ、しはらう側 (男性) とうけとる側 (女性) の双方において多数の親族が関与する。またゴゴには自分が所有するウシの飼養をほかのホームステッドに委託する慣行 (*ku-koza*) がある。受託する側はその乳のすべてと (死んだ際に) 肉の一部を利用する権利をもつ。この慣行によって、家畜を所有していないホームステッドでも乳と厩肥 (ある場合には肉) を入手できるようになる (*ibid.*: 43-53)。

厩肥の提供という点以外にゴゴの農耕と牧畜が直接関係することはほとんどないが、農作物が不

作の年 (あるいは飢饉の際) には家畜との交換により穀物入手できる (あるいは逆に豊作のときは余剰作物を販売して家畜入手する) という意味で補完的な関係にあるといえる。農耕と牧畜のくみあわせ方はホームステッドや地域によってことなるが、Rigby の観察によれば、一般に (人口あたりの) ウシの飼養頭数がおおきいほど、経営耕地面積がちいさくなる傾向があるという (*ibid.*: 43-4)。

Rigby のえがくゴゴの農耕・牧畜経済においては、貨幣経済は周辺的な役割しかはたしていない。Graham Thiele (1984: 92-4) は、こうしたゴゴの経済をおおむね「自然経済 natural economy」(商品生産が皆無、もしくは周辺的であるような経済) であると規定し、(Rigby の記述から) その内容は次の 6 つの命題にまとめられるとした⁸。

(1) ゴゴの自然経済は、雑穀農耕と家畜飼養のふたつの要素からなる。ウシを重視する価値観をもっているのにもかかわらず、(ウシをたくさん所有しているホームステッドでさえ) じっさいのサブシステムは穀物におおきく依存している。

(2) 降雨不足に起因する不作が頻繁におこるこの地域では、ウシは飢饉のさいに穀物と交換できるがゆえに重要である。

(3) 干ばつと飢饉は、降雨不足もしくは季節を通した不均一な降雨によりおこる。隣接する地域でも、片方では雨が十分にふり他方では降雨不足になるということがおこりうる。

(4) 干ばつの地域限定的な性格は、ホームステッドが頻繁に移動することの主要な理由である。家畜のための草と水をもとめて (干ばつの影響がおおきい地域からすくない地域へと) 移動する。水や土地に対する権利は相続されないことが、そうした移動を容易にしており、ある地域内のホームステッドの数はつねにふえたりへったりしている。

(5) ひとつの世帯ですべての農業労働をまかなうことはできないので、近隣で互酬的な労働集団が組織される。労働交換のパートナーがおたがいに移動するという欠点は、ウシと女性の交換 (婚姻) によってできる姻戚関係によりうめあわせられる。こうしてウシは移動の原因となると同時

8 Thiele (1984: 94-5) 自身はこの (Rigby の民族誌から抽出された) 自然経済のモデルにはいくつかの欠陥があると指摘し、その修正案として、ゴゴの自然経済が相互に連結されたいくつもの地域経済からなりたっており、そのあいだをホームステッドやウシや穀物が移動しているようなモデルをかんがえてはどうだろうかといっている。そうした移動の構造的原因となるのが土地生産性の低下であり、確率的な原因としてあるのが干ばつである。

に、移動先で有効な生産・再生産ユニットをつくるための手段ともなる。

(6) ホームステッドは周囲の土地生産性がさざると（つまり長年利用してきたため土壌が疲弊し厩肥をいれても効果がでなくなると）、肥沃な土地（新旧の）をもとめて移動する。

このようにゴゴの自然経済は、干ばつの常襲地というきびしい自然環境のゆえに、最初から移動を前提としてできあがっているといえる。そうした移動性のたかい社会をある意味で安定化させているのが、親族関係や近隣関係にもとづく社会的（互酬的）交換や、必要にせまられておこなう物々交換（あるいは物と人間との交換）であったとおもわれる。複数世帯からなるホームステッドは、ひとつの自給的な単位である。しかし同時にホームステッド（や世帯）をこえて日常的に、あるいは飢饉など危機的な状況下において、財や労働の交換がなされていた。そこで交換の対象となるおもな富の形態は、家畜（とりわけウシ）、穀物、そして（労働力としての）人間である。日常的に（あるいは平時に）おこなわれる交換としては、農作業時の共同労働（労働交換）や婚資のしはらい（女性と家畜の交換）がある。次に食料不足のさいには、穀物と家畜が交換される。Thiele (1986: 244) はこの三者がゴゴの自然経済を特徴づける交換であるとしている。そのふたつには家畜がかかわっているわけである。

ここでひとつの疑問がうかびあがってくる。それは、家畜をもたないまずしい家族は、食料不足のときにどのようにいきのびたのだろうか、また結婚のときどのようにして婚資を調達できたのだろうか、という疑問である。Maddox (1991: 36) によれば、飢饉のさいに食料の余剰がある者は、*songoleta* という慣習によって食料をもたない人をたすける義務があった。これは穀物（や場合によってはウシ）を将来おなじ量をかえしてもらうことを条件に貸しつけるものである。しかし実際にはこうした貸しつけはちかしい友人や親族相手にかざられ、したしくない者に対しては食料を貸すかわりに質草として人間（やウシ）が要求されたという。また（後述のように）飢饉のとき貧者やその家族は（ある場合にはウシとの交換により）富者の扶養家族になることによって食料をえて、いきのびたのである。逆にいえばウシとのひ

きかえに「人質」をさしだすのは、ウシのない家族がウシを手に入れるための数すくない方法のひとつだったともいえる。また Rigby (1969: 54) によれば、婚資のないまずしい青年や、飢饉などで流入してきた他地域の人がしばしば富者のホームステッドに身をよせていた。かれらは富者に婚資を提供してもらって結婚し、そのままホームステッドの一員としてとどまり家長に奉仕した。ホームステッドがおおきいこと、つまり扶養家族がおおきことは、（ウシの頭数とともに）富者の威信の源泉でもあった。

このように家畜は、交換をとおしてホームステッドに穀物や花嫁をもたらすだけでなく、それ以外の労働力をも（とくに飢饉のときなどに）もたらす点に注目しておきたい。Rigby (*ibid.*: 54-5) によれば、ゴゴ人は家畜や人間（つまり扶養家族）としての富を *sawo*、穀物による富を *uwuhemba* として区別し、前者のほうにはるかにおおきな価値をおいている。穀物は（当時の保管技術では）ながくても3年しか貯蔵できないが、家畜や人間は富の拡大に（その場かぎりでない仕方）で貢献する、というのがその理由の一端であるようにおもわれる。

(3) 1960年代以前のゴゴ社会における経済変動

Rigby の静態的な民族誌からは、彼の調査以前のゴゴの社会がどのような歴史を経てきたのかがほとんどみえてこない。そこでここでは、おもに歴史学者 Gregory Maddox の研究によって、1960年代以前にゴゴ社会が経験してきた社会経済的変動（とくに植民地統治がはじまって以降のそれ）について検討してみたい。ここで焦点をあててみたいのは、植民地期にゴゴの農村がくりかえし直面したふたつの事態である。ひとつは干ばつによる凶作とそれともなう飢饉である。もうひとつは貨幣経済の浸透ともなう商品作物生産の進展である。こうした両極端ともいべき事態に対してゴゴ人のホームステッドがいかに対応してきたかを理解するのに鍵となるのは、家畜と人間（＝労働力）というふたつの富の形態がホームステッド間の交換関係を通して（あるいは外部の市場を通して）どう再配置されてきたか、ということである。以下ではこの複雑な過程を、植民地政府の政策と関連づけつつ、時代順におっていき

3-1) 飢饉がもたらす労働力の偏在

植民地期のゴゴ人居住地域では数年とおかず干ばつ、害虫などが原因で飢饉がおこっていた。なかでも最悪のものとして記憶されているのが、第一次世界大戦のさなかとその終結直後の時期(1917 - 1920年)に発生した *Mtunya* とよばれる大飢饉である。Maddox (1990)によればこの飢饉は(一義的には降雨不足に起因する穀物の不作によっておこったものだが)単なる自然災害というよりも、むしろ人災であった。大戦当時いまのタンザニア本土部はドイツとイギリスの戦場となっていた。ゴゴ農村では独英双方の軍隊・政府によっておおくの穀物、ウシ、人間が徴発され、そこに干ばつがおこったのである。

地域の人口15万人の約5分の1が死亡したとされるこの飢饉では、通常の関係や危機対応のしくみは崩壊した。食料が絶対的に不足するなかで相互扶助は後退し、暴力が横行した。食料を貸しあえるかわりに「人質」が要求される場合もあった。食料のない人々はみずから富裕な家族の寄食者となるか、あるいはウシなどとひきかえに子供をひきわたさざるをえなかった (*ibid.*: 187-91)。こうした過程で、穀物余剰のある地域では(もともと多数のウシを所有する)富者が扶養家族(すなわち手持ちの労働力)の数をふやし、飢饉の終結後はその労働力をつかって(後述のように)換金作物生産を拡大し、ますます富を蓄積した (*ibid.*: 188, 196)。

大戦終結後の1919年にはようやく英国植民地政府当局による食料援助がおこなわれたが、全員にいきわたるにはほどとおいばかりか、食料は一部をのぞいて販売されるか、返済を前提に貸しつけられるか、もしくは労働とひきかえでなければ提供されなかった (*ibid.*: 192-5)。大飢饉 *Mtunya* のあと、飢饉救済にかかわる財政コストを削減するため、地方政府はゴゴ農民に(平時から飢饉にそなえるため)自給用穀物を増産させようとしていくつかの政策を実行しようとしたが、効を奏さなかった (Thiele 1984: 96; Maddox 1991: 36)。他方で、一部世帯による換金作物生産や余剰作物の販売は着々とすすんでいったのである。

3-2) 商品作物生産の進展

ゴゴ人による商業的農業生産の起源は、19世紀後半にまでさかのぼることができるようであ

る。このころ東アフリカの沿岸と内陸をむすぶキャラバン交易がさかんになり、隊商とゴゴ人とのあいだで物資のやりとりがおこなわれるようになっていた。ゴゴの各儀礼区 (*yisi*) の首長たち (*watemi*) はキャラバンから関税として奴隷、鉄のクワ、布などを徴収した。首長やクランの有力者たちはまた(所有するウシを利用して)家族の成員をふやして食料を増産し、キャラバンに提供した。鉄のクワの導入はおそらく農業生産の効率をあげることに伴い、農地の拡大をもたらし、有力者たちはまた象牙との交換によっても奴隷を手に入れ、農業生産に従事させた (Iliffe 1979: 73; Maddox 1995: 9; 1996: 48)。

こうして19世紀からおこなわれていた交易目的の農業生産は、植民地期に進展する。とくに第一次大戦や前述の大飢饉 *Mtunya* の混乱がおちついた1920年代には換金作物生産がさかんになり、ピーナッツや主要穀物類がゴゴ人居住地域から出荷されていた。1927年にはゴゴ人居住地域をカバーする三つの県 (Dodoma, Manyoni, Mpwawa) での市場向けピーナッツ生産量は3,575トンに、市場向けソルガム、ミレット(トウジンビエ?)、トウモロコシの生産量は3,793トンに達した。植民地期ぜんたいを通してこの時期にいちばんおおくの量が出荷されていた。

こうした商業的農業生産の進展の背景には、(19世紀と同様に)ウシをたくさん所有する富者の存在があったようである。上述のように多数のウシを所有していることは、それだけたくさんの労働力をホームステッド内に(従者や妻として)かかえることができることを意味する。また、その資力をつかってホームステッド外部の労働力を(穀物などを対価として)短期的に「やとう」こともあったようである。このように貨幣経済があまり浸透していない状況下では、依然として(貨幣よりも)ウシが労働を動員する力としておおきかった (Maddox 1996: 53-5, 64; 1991: 36-7)。

市場向け農業生産はしかし、大恐慌後の1930年代以降は後退した。第二次大戦中の停滞期を以て1950年代なかばからふたたび農作物の出荷がふえ、1960年にはピーナッツの出荷量が1920年代の水準に回復した (Dodoma 県のみで2,444トン)。1940年代から1950年代にかけてはまた(後述のような労働力不足から)広大な耕地を経営することがむつかしくなり、労働投下がす

くなくてすむあたらしい換金作物としてヒマワリ、トウゴマ、ゴマ、タマネギ、トマトなどが作付されるようになった。またおなじころソルガムやミレットの出荷は減少の一途をたどり、(より干ばつによわい) トウモロコシが商品用穀物としてますます重要性をましていった (*ibid.*: 54, 58, 64)。このころになると「富者が手もちの労働力をつかって農業生産を拡大する」といった図式では商業的農業のあり方をとらえることができなくなってきた。なぜなら次にみるような事情から、ウシが労働力を支配・動員する力が徐々にうしなわれていったからである。

3-3) 貨幣経済の浸透と出稼ぎの増加

大恐慌後の1930年代から第二次世界大戦をはさんで1950年代にかけてのゴゴ社会におこった重要な変化は、貨幣経済のさらなる浸透と、労働力の域外への流出である。こうした事態は、以下にみるように家族経済におけるウシの役割をおおきくかえることになった。この時期はまたゴゴ人居住地域でくりかえし飢饉が発生した時期でもある。おおきなものだけでも1941(1939?)-43年の飢饉 *Joni*、1946-47年の *Hambaya*、1949-50年の *Mvuje*、1952-54年の *Maumau* などの飢饉がおこった (Rigby 1969: 21; Maddox 1991)。

大恐慌直後の経済不況下では(おそらく農家の現金収入が不足していたため)、飢饉のさいに穀物など食料を取得するのに、ウシでなく貨幣でのしはらいを要求されることがあった。1940年代には飢饉のさいに政府による食料援助もおこなわれたが、有償であったため一部の住民は政府に対して借金を負う破目におちいった。こうして穀物を得るのにますます貨幣が必要となっていくと同時に、家畜の販売もふえていった。1928年に農作物価格が下落して以降、税金のしはらいなど必要にせまられてウシを販売する者が劇的に増加した。また戦時体制下(1940年～)では一種の軍需物資としてウシを販売するよう圧力がかった。ウシはまた1943年の飢饉のときも多数うりはらわれた。戦後はウシの販売価格が飛躍的に上昇したため、ウシのもちぬしにとって、ウシはもはや労働力を支配するための富というより、(それをうって利益をえるための)単なる商品と化していった。こうしてゴゴ農村のウシの絶対数がへっていくなかで、ウシを所有する者もへり、婚

資として必要な頭数も減少して一部貨幣で代替可能にさえた (Maddox 1996: 56-; 1991:37, 41; Thiele 1984: 96)。

次に労働力の域外流出についてみてみよう。そのきっかけとなったのは植民地政府による戦時施策として1940年からおこなわれたゴゴ人男性の徴用である。じっさいには軍人となったのはごく一部で、おおくは(サイザルとゴムの)プランテーション労働者として雇用された。その後1944年までに出稼ぎはゴゴの経済の重要な一部となった。しかし同時に、おおくの壮年男性が出稼ぎにでたため、(労働力不足から)穀物の収穫量は減少し、これが飢饉を悪化させる原因ともなった。食料をえる手段としてますます貨幣が不可欠になっていたため(また日常生活での食費以外の出費もふえたため)、戦争終結後も男たちは出稼ぎをやめなかった。飢饉の最中でもあった1954年には、ドドマ県の納税者の20%が出稼ぎをしたという (Maddox 1991: 37-9; Thiele 1984: 96-7)。こうして、これまで(とくに飢饉などのさいに)おなじゴゴ人のほかのホームステッドに依存してきたまじしい人々は、いまやゴゴ社会外部の雇用に活路をみいだすようになったのである。

3-4) まとめ

ここまでみたように、Maddox (1991, 1995, 1996)は、植民地期の飢饉は単なる干ばつなどの自然現象によるものだけでなく、植民地経済にくみこまれることで従前のゴゴ社会の運営のしくみ(飢饉など緊急時における財の再分配システムをふくむ)が崩壊したことに原因があるという点を強調している。それを象徴しているのが、ウシが人間を支配する力の衰退である。従前の社会ではウシは(穀物や貨幣をもたらすだけでなく)ホームステッドに女性と子どもをもたらし、(とくにウシのない世帯からの)労働力をもたらした。そしてその労働力をつかって農業生産を拡大することができた。しかし第二次大戦中の労働需要によりゴゴ人の男が出稼ぎにいくようになって、ウシ所有者が労働力を統制する力をうしなった。またウシはますます単なる商品として市場でうられるようになっていった。婚資の額(頭数)も下落し、貨幣でも代替可能となった。こうしたMaddoxの記述をよむかぎりでは、ウシを中心に運営されて

いたゴゴの伝統社会のしくみは、植民地経済によっていったん宥なさまでに破壊されたとの印象をまぬがれがたい。

そこで、これといくぶん対照的な見方として、ゴゴの自然経済の回復力を強調する Thiele の見解をあげておこう。Thiele (1984: 97) は干ばつ(に起因する飢饉)がゴゴの自然経済を分断し、そのことでゴゴは(市場を通して貨幣や商品とつながるような)労働者や消費者にならざるをえなかった、という主旨のことをのべている。たとえば1950年代の「自発的な」出稼ぎの背景にあったのは、飢饉である。また地方政府は(戦時中)飢饉のときに食料援助とひきかえに多数の住民を(労働者として)公共事業に動員した。また平時は町にしかない食料品店は、干ばつときには農村に店をひらいて多額の収入をえていた。しかし、こうした事態は必ずしもゴゴの生業経済が完全に市場経済に包摂されたことを意味しない、というのが Thiele の見方である。1940～50年代にゴゴ人たちが賃労働をしたりウシを販売したりしたのは、農作物の不作によりしかたなくやったことで、飢饉がおさまると自然経済は復活した、というのである。たとえば1953-54年の飢饉のさいには家畜販売がふえドドマ県のウシ頭数が3分の1に減じたが、その後4年の安定期をへてウシ頭数は飢饉以前の水準にほとんど回復したという。また1955年にゴゴ人居住地域で豊作だったときには、それまでゴゴ人の雇用労働に依存していたイリンガのトウモロコシ生産者が労働力不足におちいった⁹(*ibid.*: 97-8; Iliffe 1979: 457)。

こうして植民地化がもたらしたあらたな政治経済体制によって翻弄されてきたゴゴの農村経済であったが、以下にみるように、支配者としての英国人がさったあとも、ふたたびやっかいな国家というものに直面せざるをえなかった。

(4) ウジャマー政策下のゴゴ農村経済

1961年に英国から独立したタンガニーカ(1964年にザンジバルと合邦しタンザニアと改称)政府は、1967年頃より明白な社会主義政策(ウジャマー *Ujamaa* 政策)を採用する。農村においては、政府はまずそれまで散居形態にあった

農家をあらたにつくった「ウジャマー村」に集住させ、農作業の共同化をはかった。このウジャマー村計画が重点的に実施された地域のひとつがゴゴ人がすむドドマ州であった。1971年以降におこなわれたドドマ州での移住作戦(Operation Dodoma)では、ひろい範囲にわたってかなり強引な手法で集村化を実行した。農民に集住を強制した政府の意図は、そのことで住民に清潔な生活用水を安定的に供給し、教育や医療のサービスを充実させるだけでなく、耐乾燥性作物を導入し、共同の穀倉や乳製品の加工場を建設し、さらにはウシの品種改良や牧草地の利用方法改善なども実現させようとするものであった(Elman 1977: 250; 吉田 1997: 196)。

しかしこうした無理な集住化は必然的に既存の(つまり移動性のたかい)農耕、牧畜そして社会システムとぶつからざるをえず、さまざまな問題が起こった。村のまわりの畑はくりかえしつかうために土壌が劣化して生産性がおちた。しかたなく村からはなれた土地に新規に畑をひらいた場合は、遠距離をあるくという肉体的負担がふえただけでなく、(目がいきとどかなくなるため)害虫や鳥獣や病気の被害を作物がうけやすくなり、また村から畑に厩肥をはこぶのが困難になった。また家畜の集中は過放牧による植生の劣化を必然的にともなった(Schmied 1993: 157; Mascarenhas 1977: 379; Thiele 1986: 249)。

Thiele (1984, 1986) は、1980年代初頭にドドマ市南部の三つのウジャマー村 Nkulabi, Matumbulu, Mlowa において農業経済学的調査をおこなっている。この三箇村はその地理的条件によってそれぞれ特徴のある経済を形づくっていた。集村化によって一箇所に人口が集中したため一般に耕地不足、牧草地不足におちいるなか、Mlowa 村のみはあたらしい開拓地だったため、土壌が肥沃で農業生産力がたかく、また放牧地にも余裕があった。他方で、既存の集落のうえにさらに人口が集中した Nkulabi, Matumbulu の二村は1971年以降穀物不足におちいていた。

自給分以上の穀物を生産できた Mlowa 村では、余剰穀物(や現金)をもちいて他の村からの労働者をやといれることで農業生産をさらに拡

9 このエピソードを Thiele は「自然経済の復活」という文脈で引用している。しかし、1955年以降はドドマでもまた換作物生産がふえており、労働流出をうけて収穫時の労働力が不足し、労賃(現金もしくは穀物で換算される)も上昇していた(Maddox 1991: 41)。したがってゴゴ人労働者がイリンガでのしごとをやめて帰郷したのは、賃労働をやめて自然経済に回帰したということではなく、故郷でのべつの賃労働(農業労働)につくためだったという可能性も否定できない。

大することができた。一方で、食料不足の Nkulabi 村では、家畜をもたない人は Mlowa 村などへ農業労働者として出稼ぎにいかざるをえなかった（とくに1月の耕起の時期）。労働力不足におちいった Nkulabi 村では耕地を拡大して穀物生産量をふやすことが一層困難になった。家畜をもっている人ですらそれを Mlowa 村など穀物余剰のある地域へもって行って穀物と交換（あるいは家畜を販売してえた現金で購入）せざるをえなくなった。他方でドドマ市にもっともちかい Matumbulu 村では、穀物は（Nkulabi 村と同様に）ひどく不足しているものの、町へ木炭（やトマト）を販売する商売がさかんなため三村のなかでもっとも現金収入がおおい。同村の住民は穀物の不足分を現金で購入しておぎなった。以上のような状況の変化のなかで家畜もまた Mlowa 村など開拓地に徐々に集中するようになり、同村では Nkulabi, Matumbulu 両村とくらべて1.6倍もの人口あたり家畜数（stock unit）をかかえていた。

こうしてウジャマー村への集住を強制され、またその後の移動も困難であったため、各村に定着した人々はそれぞれの地理的条件に応じて生業戦略を多様化せざるをえなくなった。つまりホームステッドを移動させることで従来型の農耕-牧畜複合を維持していくのではなく、状況に応じてそのくみあわせを変更するか、あるいはほかの生業に活路をみいだすことを余儀なくされたのである。おなじ時期に穀物や家畜の商品化の度合いがますますたかまってきた（つまりますます貨幣を媒介として取引されるようになった）ことは、そうした戦略変更に拍車をかけたとかんがえられる。

農作物や家畜の商品化と同時に進展したのは、労働力の商品化であった。Thiele の調査時において、農業労働力の調達にあたって労働交換（beer party）を実施したのは三村のサンプル世帯の14%にすぎなかったのに対し、穀物生産にかかわる雇用関係をもつ世帯は41%にのぼった。上述のように、そうした雇用関係は村をこえて結ばれていた。また従前は労働力を得るため（あるいはホームステッド間の協力を推進するため）の重要な機会であった婚姻のあり方も変化している。婚資に必要なウシの頭数はへったうえに一部は貨幣におきかえられるようになり、また母方親族が婚資の供出を負担する割合はへって花婿自身

が（おおくは現金で）負担する割合がふえていた。またほんらいなら（ウシを蓄積しつつあり婚資の額もたかい）Mlowa 村では婚姻などを機にホームステッドの規模が拡大してもよいはずだが、そうした事実はみられない。このことは、ホームステッドの扶養者をふやすことで農牧生産の拡大をはかるという従来型の生計戦略があまり重要でなくなってきたことを示唆している。労働力が必要なら外部から人をやとえばすむからである。こうしてホームステッドそのものが居住地を移動できなくなった状況下で、自由な労働力だけが商品として移動（流通）するような状況にちかづいていった。

以上の事実をふまえて Thiele (1984: 106) は、前述のようなゴゴの「自然経済」が1970年代の集村化以降は「小農経済 peasant economy」（小商品生産をおこなう経済）に移行したとかんがえた。1960年代以前の、部分的には市場経済にまきこまれてもいつでも自然経済に退却できるような状況は、ウジャマー政策後に一変したというのである。

(5) ウジャマー政策以後のゴゴ農村経済

1980年代なかば以降になると、それまでのウジャマー政策のしぼりがゆるくなり、一部の人々は集住村をはなれて別の地域に新天地をもとめて移住するようになる。2000年から2001年にかけてドドマ市西方のパヒ湿地近くの農村（Chipanga B）で調査した長谷川（2002）は、そうした移住がおこなわれたあとの（いわばウジャマー後の）ゴゴ人の農耕-牧畜複合のあり方について報告している。長谷川によれば同村の領域は、ウジャマー政策によって成立した「集村地帯」と、1980年代なかば以降に形成された「移住地帯」に分類することができる。まず集村地帯では、移住地帯にくらべ牧畜にかかわるホームステッドはかなりすくないが、農耕においては、商品化のすすんだ主食穀物である改良種ソルガムとトウモロコシの作付けがさかんである。こうした換金性のある穀物に対しては、かざられたウシ飼養家族から無償で提供される厩肥が積極的に投入されている。また集村地帯の人口構成をみると壮年男性の比率がかなりひくい。はたらきざかりの男性のおおくが村外で就業しているためとみられる。

他方で移住地帯においては、集村地帯とおなじ

く改良種ソルガムやトウモロコシもつくられているが、自給用の在来種ソルガムやトウジンビエの栽培にも（集村地帯にくらべて）熱心である。移住地帯のホームステッドの特徴は男性労働力がおおく、牧畜に力をいれていることである。長谷川のサンプル調査では、じっさいにウシを「所有」しているホームステッドは半数以下であるが、受託飼養や雇われ牧夫をふくめると9割以上のホームステッドが何らかのかたちで牧畜にかかわっていた。そもそも、こうした移住地帯を最初に開拓したのは多数の（100頭以上の）ウシをもつ富者のホームステッドであった。従前のようにホームステッド内部に多数の扶養家族（＝労働力）をかかえて仕事に従事させることがむつかしくなっている状況のなかで、富者は、家畜がないホームステッドにウシを委託するとともに、（村外就業の機会にめぐまれないような）無職の男性を牧夫としてやとい、現金収入（あるいは家畜取得）の機会と搾乳権を提供している。

この長谷川の報告する事例からは、ウジャマー村からの移住が自由になった状況下で、新天地で家畜をふやすとともに自給農業にも力をいれる、という従来型の生業戦略に回帰するホームステッドがでてきたことがうかがえる。とはいえ、おなじバヒ湿地周辺の1940年代のデータでは9割以上のホームステッドが家畜を飼養していたのに対し、1998年のChipanga B村ではその割合が34%にとどまっている。ところがこの間に人口あたりの家畜数（stock unit）にはほとんど変化がみられない（*ibid.*: 17）。つまり一部のホームステッドに家畜が偏在する傾向にあることがわかる。またウジャマー村（集村地帯）にのこった家族は（土地の制約から）牧畜を拡大することはできず、そのかわり換金作物生産や出稼ぎに力をいれざるをえなくなっている。

こうして現在のゴゴ農村においては、牧畜、農耕という従来からあった生業にくわえて村外就業や家内工業など多種多様な生業活動がおこなわれており¹⁰、住民はそれぞれの地域や個人の事情によって最適と判断される生業のくみあわせを選択する。しかし農業や牧畜以外の収入の機会がふえ

たからといって、それがただちに農業や牧畜の放棄につながるわけではない。現金収入がすくないなかで、農村住民はやはり最低限の食料（農作物）は自給せざるをえないし、余剰があればつねに農作物販売の機会をうかがっている¹¹。また現在では上述のデータにあるとおりホームステッドのおおくは家畜をもっていないが、たくさんのウシを飼養できる条件下においては、大規模な牧畜を展開する富者があらわれる。

農耕と牧畜の有機的結合のあり方もまたかわりつつあるようである。たとえばRigbyの調査時にはおそらくほとんどなかったとおもわれるウシによる犁耕や（農作物そのほかを運搬するときにつかう）牛車¹²が、最近普及しつつある。また、おそらく養分要求性のたかい改良種ソルガムやトウモロコシの栽培が普及していることもあって、従前より農業において厩肥が多用されるようになってしていると推測される（長谷川 2002: 21）。

5. 結論

ここまで、タンザニア北部～中央部の大地溝帯周辺に居住するイラク人とゴゴ人という農牧民を事例として、半乾燥地における農耕・牧畜複合の歴史の変遷をみてきた。どちらも農耕を基本として、牧畜を副次的生業としながらも、その価値観においては家畜とりわけウシに非常におおきな執着をもっているという点で共通していた。

農耕と牧畜を複合した生業をもつということは、半乾燥地では重要な生活戦略であった。家畜（ウシ）は平時にミルクや厩肥を供給してくれるだけではない。とくに農作物の不作という危機をきりぬけるのに家畜はたいへん重要な役割をはたしていた。干ばつで十分な穀物がとれないときでも、家畜は生きのびることがおおいので、それを穀物と交換することができる。またほかの非常事態、たとえば病人の治療に多額の現金が必要になったときや、何らかの事情で居住地を変更せざるをえなくなったときなども、交換財または食料供給源としての家畜がはたす役割はおおきかったとおもわれる。

10 2010年の調査で筆者らが確認した（農業、家畜販売、村外就業以外の）現金収入源としては、レンガづくりや、（女性による）塩づくり、土鍋づくり、（芸能集団による）興行など多様なものがあった。

11 近年ドドマ市周辺の農村部におおきな現金収入をもたらしているものに（ワイン生産用の）ブドウづくりがある。また、乾季に水を入手可能なところでは、たとえ小面積でも野菜などをつくって現金収入の機会を得ようとする姿勢がうかがえた。

12 Rigby (1969: 57-8) は、ゴゴは牛に荷をひかせようなどと夢にもおもわないだろう、という主旨のことをのべている。

家畜は同時に、平時においても（土地が無価値な状況下で）富の蓄積や投資さらには富の再分配のための重要な手段であった。家畜という財産はかならず家畜をたくさんもつ富者をうみだす。イラク人やゴゴ人の「ウシ持ち」は、一種の危険分散のための戦略としてみずからが所有する家畜の飼養をほかの家族に委託することがおおい。それは家畜をもたない世帯に乳をあたえるという意味で富の再分配という側面をもっている。またゴゴにおいてもイラクにおいても、富者が家畜を元手（資本）として農業生産に投資する、ということがふるくからおこなわれていた。たとえば20世紀前半のゴゴの場合、ウシの力によって労働力（扶養家族）をふやした富者が農業生産を拡大していた。1960 - 70年代のイラクにおいては、より近代的な農業拡大戦略がとられていた。そこではウシをうってえた資金でトラクターを購入するというように、商品作物生産に積極的に投資する富裕層がみられた。

すでにふれたように福井（1969）は、ヨーロッパなどに典型的にみられる有畜農業（そこでは農と牧が有機的に結合している）とアフリカの半農半牧という生業形態との比較をこころみている。福井のえがくアフリカ農牧民のモデルは、農と牧が相互に無関係なのでそれぞれの割合を融通無碍に変更して所与の環境に適応する、というものであった。そこでは（家族労働力が一定と仮定すれば）農耕の比重がおおきければ牧畜の比重はへり、逆に牧畜の比重がたかければそれに応じて農耕の比重はへる、つまり農耕と牧畜はおおむね反比例の関係にあると想定されている。これは完全な自給自足経済であれば、あてはまる図式かもしれない。しかし農作物が商品化された段階では、農業と牧畜のあいだには（有畜農業におけるのは）べつの相互依存関係がなりたちるのである。それは牧畜で富を蓄積したもののほど農業生産を拡大できるという正比例の関係である¹³。

こうして農耕を主体とするイラクやゴゴにとって、家畜の保有は「危機への（あるいは危機にそなえた）対応」という側面と同時に、「（農業生産

の拡大という）機会への対応」という側面をもっていた。しかし一般に独立以降、農牧民にとっての家畜の価値が低下したことは疑いない。イラクとゴゴの場合も、紆余曲折はありながらも、植民地期から独立後のウジャマー政策の時期をへて貨幣経済の浸透がすすみ（つまり人間労働、家畜、農作物その他の商品化がすすみ）、従前のような（唯一の相続可能な）富あるいは交換財としての家畜の役割は、しだいに貨幣によっておきかえられていった¹⁴。同時に、土地や家屋など不動産の価値がしだいにたかく評価されるようになってきている。

しかしそれはイラク人やゴゴ人の従来型の農耕 - 牧畜複合経済が消滅したことを（あるいは消滅にむかいつつあることを）かならずしも意味するものではない。現在でも、イラクやゴゴの農民にとって、自給作物や換金作物の生産とともに（以前ほどではないとはいえ）家畜飼養は重要な生業の一部でありつづけている。一部の富者にとっては資本蓄積の手段として（機会への対応）、貧者にとっては一種のセーフティー・ネットとして（危機への対応）、家畜がはたす役割は依然として重要である。換金作物生産、都市へのでかせぎ、農村副業としての家内工業、このいずれもが十分な現金収入をもたらさないという今の状況がつづくかぎり、東アフリカで農牧という生業複合がなくなることは当面ないものとかんがえられる。

参考文献

- Börjeson, L. 2004. "The History of Iraqw Intensive Agriculture, Tanzania," in M. Widgren and J. E. G. Sutton (eds.) *Islands of Intensive Agriculture in Eastern Africa*. Oxford: James Currey: 68-104.
- Christiansson, C. 1981. *Soil Erosion and Soil Sedimentation in Semi-arid Tanzania: Studies of Environmental Change and Ecological Imbalance*. Uppsala: Scandinavian Institute of African Studies.

13 同様のことはイラクの事例を調査した和田（1978: 426）も指摘している。また太田（1998: 308）によれば、おなじ大地溝帯のケニア側にすむ民族チャムスの事例においても、家畜の保有数と農耕地面積が正の相関をもつ。そこでは1950年代から政府によってすすめられた近代的かんがいプロジェクトのもとで換金作物生産が進展し、おおきな家畜群をもつ富者は家畜を売却してえた資金でトラクターなどを購入し農業生産を拡大した。農業からの利益はさらに家畜の購入という形で投資され、さらなる資本の増大につながっていた。

14 こうした従前の社会的交換関係が市場をとおした交換におきかえられていったという過程は、しかし、かならずしも不可逆的な変化とみなす必要はない。たとえば Thiele（1984）によって1980年代に消滅の一步手前と報告されていたゴゴ農村の労働交換も、一條（2008）の報告によればいまだに一定程度おこなわれている。

- Elman, E. 1977. "Group Farming Experiences in Tanzania," in P. Dorner (ed.) *Cooperative and Commune: Group Farming in the Economic Development of Agriculture*. University of Wisconsin Press.
- 福井勝義. 1968. 「ハナン山麓の自然とイラク族の生活形態：半農半牧をめぐって」今西錦司・梅棹忠夫編『アフリカ社会の研究』西村書店、pp.275-96.
- . 1969. 「半農半牧民の生態学的考察：イラク族の移住と定着をめぐって」『アフリカ研究』9号：1-18.
- 長谷川竜生. 2002. 『農牧複合型生業の持続性とその現代的展開：タンザニア、ゴゴの事例』京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科提出博士予備論文.
- 一條洋子. 2008. 「タンザニア農村における労働力調達手段の実態および選択変化の要因に関する考察」『農林業問題研究』170: 269-75.
- Iliffe, J. 1979. *A Modern History of Tanganyika*, Cambridge: Cambridge University Press.
- . 1995. *Africans: The History of a Continent*. Cambridge University Press.
- 今西錦司. 1965. 『人類の祖先を探る：京大アフリカ調査隊の記録』講談社.
- Loiske, V. 2004. "Institutionalized Exchange as a Driving Force in Intensive Agriculture," in M. Widgren and J. E. G. Sutton (eds.) *Islands of Intensive Agriculture in Eastern Africa*. Oxford: James Currey: 105-13
- Maddox, G. 1990. "Mtunya: Famine in Central Tanzania, 1917-1920," *Journal of African History*, 31-2: 181-198.
- . 1991. "Famine, Impoverishment and the Creation of a Labor Reserve in Central Tanzania," *Disasters*, 15-1: 35-41.
- . 1995. "Introduction: The Ironies of *Historia, Mila na Desturi za Wagogo*," in M. E. Mnyampala, *The Gogo: History, Customs, and Traditions*. New York: M. E. Sharpe: 1-34.
- . 1996. "Environment and Population Growth: In Ugogo, Central Tanzania," in G. Maddox, J. Giblin and I. Kimambo (eds.) *Custodians of the Land: Ecology and Culture in the History of Tanzania*, London: James Currey: 43-65.
- Mascarenhas, A. C. 1977. "Resettlement and Desertification: The Wagogo of Dodoma District, Tanzania," *Economic Geography*, 53: 376-80.
- Mnyampala, M. E. 1995. *The Gogo: History, Customs, and Traditions*. New York: M. E. Sharpe.
- 太田 至. 1998. 「アフリカ牧畜民社会における開発援助と社会変容」高村泰雄・重田眞義編『アフリカ農業の諸問題』京都大学学術出版会、pp. 287-318.
- Rigby, P. 1969. *Cattle and Kinship among the Gogo: A Semi-pastoral Society of Central Tanzania*. Ithaca: Cornell University Press.
- Schmied, D. 1993. "Managing Food Shortages in Central Tanzania," *Geo-Journal*, 30-2: 153-8.
- Schneider, H. 1979. *Livestock and Equality in East Africa*. Bloomington: Indiana University Press.
- Snyder, K. A. 1996. "Agrarian Change and Land-Use Strategies among Iraqw Farmers in Northern Tanzania," *Human Ecology*, 24: 315-40.
- . 2005. *The Iraqw of Tanzania: Negotiating Rural Development*. Westview Press.
- Sutton, J. E. G. 1990. *A Thousand Years of East Africa*. Nairobi: British Institute in Eastern Africa.
- Thiele, G. 1984. "State Intervention and Commodity Production in Ugogo: A Historical Perspective," *Africa*, 54-3: 92-107.
- . 1986 "The Tanzanian Villagisation Programme: Its Impact on Household Production in Dodoma." *Canadian Journal of African Studies*, 20-2: 243-258.
- Tomikawa, M. 1979. "The Migrations and Inter-Tribal Relations of the Pastoral Datoga," *Senri Ethnological Studies*, 3: 15-31.
- 富川盛道. 2005. 『ダトーガ民族誌：東アフリカ牧畜社会の地域人類学的研究』弘文堂.
- 和田正平. 1968a. 「イラク地域集団の形成過程と変動：土地占有の諸問題」今西錦司・梅棹忠夫編『アフリカ社会の研究』西村書店、pp.297-305.
- . 1968b. 「イラク地域集団の構造と機能：半

- 農半牧民の地縁論理」今西錦司・梅棹忠夫編『アフリカ社会の研究』西村書店、pp.306-314.
- . 1978. 「東アフリカにおける部族農業の特質：半農半牧民の生業形態を中心に」加藤泰安・中尾佐助・梅棹忠夫編『探検地理民俗誌』中央公論社、pp. 409-27.
- . 1980. 「伝統社会の崩壊過程：ハナン山麓イラク族ギティン村の事例から」富川盛道編『アフリカ社会の形成と展開』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、pp.395-406.
- 米山俊直. 1990. 『アフリカ農耕民の世界観』弘文堂.
- 吉田昌夫. 1997. 『東アフリカ社会経済論：タンザニアを中心として』古今書院.